人間文化創成科学論叢　第14巻　2011年

# ニューカマー中学生の困難対処におけるソーシャルサポートの活用

## ―日系ブラジル人生徒のソーシャルサポートのリソースと機能を中心に―

岡　村　佳　代*

# The use of social support in coping with difficulties: Focusing on resources and functions of Japanese Brazilian students' social support

OKAMURA　Kayo

**abstract**

The purpose of this study is to consider about resources and functions of social support for newcomer students. Semi-structured interviews were conducted on 6 newcomers whose ages were 19 to 25. In these interviews, they were asked to talk about the difficulties, coping behaviors and how family, teachers, friends and people of local community supported them when they were junior high school students. From the analysis of these interviews, the results were as follows: (1) the newcomer students had acquired a variety of resources in family, school and local community; (2) each community had support functions both of instrumental and emotional; (3) by ways how to use resources, 6 newcomers were classified into three types, < general lack of social support >,< use of social support from family community > and < use of social support from local community >. Furthermore, the characteristics of these types were found. It was indicated that newcomer family community was essential to working with other communities, and school community was important to take advantage of various resources in the school and much support for teachers, and local community could act as a safety net. It was suggested the importance of each communities' cooperation.

Key words: Newcomer students, Social support, Family community, School community, Local community

## 1　研究背景と問題の所在

1990年の入管法の改正以後、ニューカマー[1]とよばれる外国人が増加し、2010年末現在の外国人登録者は2,134,151人となっている（法務省入国管理局，2011）。在留資格別に見てみると、一般永住者が565,089人と過去最高となり、定住化傾向にあることが読み取れる。さらには、子どもなどの家族を伴って来日するニューカマーや日本生まれのニューカマーの子どもも増加しており、地域コミュニティや学校コミュニティにおいてもニューカマーの存在は珍しいものではなくなっている。日本の学校に通うニューカマーの子ども（以下、ニューカマー生徒）は、多くの場合、家庭内の文化と日本の学校文化が異なることにより、学校への適応上の困難を経験することが報告されている（例えば、佐藤，2001；光長・田渕，2002）。また、近年増えている日本生まれや幼少期に来日しているニューカマーの子どもの困難さとして、清水（2006）は、教師からある程度「やれている」、つ

キーワード：ニューカマー生徒、ソーシャルサポート、家族コミュニティ、学校コミュニティ、地域コミュニティ

＊平成22年度生　比較社会文化学専攻

まり、「日本語による教師の指示や子ども同士のやりとりに対する反応に大きな逸脱がない」状況であると判断されることにより、手厚い支援がなされないことを指摘している。加えて、学業達成が低位にとどまることに関しても、子ども個人の努力の問題として説明されることなどを挙げている。さらに、竹山・葛西（2008）は、ニューカマー生徒の来日によって生じた課題と現状について中学校に在籍するニューカマー生徒への支援を行う日本語ボランティア教員に対し半構造化インタビューを行った。その結果、言語、学校、家庭環境などの環境的要因がニューカマー生徒の精神面への影響を及ぼしている現状や、ニューカマー生徒が学校で「外国人」としての孤独感、居場所のなさを感じていることに加え、両親が仕事で不在がちであるため家庭においても孤独を感じていることが示された。以上のように、これらの質的な先行研究においては研究者や支援者の視点からニューカマー生徒の困難がまとめられており、ニューカマー生徒は学校のみならず家庭においても困難を抱えていることや、環境的な面に加えて精神的な面でも困難を抱えていることが示されている。

一方、ニューカマー生徒自身の視点から学校生活の困難を捉えることを目的とし、ニューカマー生徒を対象に量的調査を行った研究に岡村（2011）がある。岡村（2011）では、ニューカマー生徒192名を対象に質問紙調査を行い因子分析を行った結果、ニューカマー生徒の困難として「情報・サポート不足」「日本人ピアとの不和」「学校・教師不信」「同化要請」「日本人の異文化理解不足」「部活文化への困惑」の６因子が抽出された。これらの困難に対するニューカマー生徒の対処行動としては、「問題解決」「感情的自己主張」「肯定的回避」「否定的回避」「サポート希求」の５因子が抽出され、ニューカマー生徒が自ら工夫し、困難に対処していることが明らかとなった。また、中学生と高校生の比較からは、困難に質的な差異が認められたが、対処行動には差異が見られなかったため、年齢や学年、教育レベルが上がることによって対処行動が向上するわけではないことが示された。さらに、「学校・教師不信」のような困難に対しては、「問題解決」や「肯定的回避」等の個々の対処だけでは対応しきれないことが考えられ、「サポート希求」のような対処行動の重要性、さらにはニューカマー生徒が「サポート希求」しやすい環境を作って行くことの重要性が示唆された。つまり、個々の対処行動に加え、周囲からのサポートが必要不可欠であることが考えられる。

困難対処における周囲からのサポートの重要性については、ソーシャルサポートに関する研究において言及されている。ソーシャルサポートとは、家族、友人、学校の仲間や教師、職場の同僚や上司、近隣の人たちとの結びつきと、この結びつきから得られる様々なサポート（箕口，2007）のことである。このソーシャルサポートが利用できない、または不適切であり、個人的な対処方略が乏しいとき、最も危機を経験する（Levine&Perkins, 1987）といわれていることから考えても、困難対処においてソーシャルサポートを得ることがいかに重要であるかが理解できる。また、ソーシャルサポートはコーピングのための一つのリソースである（Dalton,J.,Elias,M. J.,&Wandersman,A., 2001）とも言われており、ニューカマー生徒の対処行動を向上させるという観点においても、ニューカマー生徒に対するソーシャルサポートを充実させることが重要であるといえる。

ニューカマー生徒に対するソーシャルサポートに関する研究としては、学校、ボランティア団体や自治体等の地域コミュニティにおける日本語指導、生活指導、教科学習指導や母語支援、進路サポートなどの教育支援に関する実践報告が行われている（例えば、中西，2010；末藤，2011）。このような道具的サポートのほかに、日本語ボランティアや大学生による居場所の提供や相談相手になるなどの情緒的サポートも行われている（例えば、竹山・葛西，2008；中西，2010）ことが報告されている。また、長崎（2009）は、中学校における、スクールコーディネーター、教員、養護教諭、スクールカウンセラー等による、ニューカマー生徒への教育相談、学習援助、日本語学習のチーム援助を報告しており、学校や地域コミュニティにおいて様々なサポートが行われていることが分かる。これらのニューカマー生徒のソーシャルサポートに関する研究を構造的次元[2]からまとめると、教員やスクールカウンセラーなどの学校コミュニティにおけるリソースからのサポート、大学生やボランティアなどの地域コミュニティにおけるリソースからのサポートに大別でき、ニューカマー生徒がソーシャルサポートのリソースを活用していることが示されている。また、機能的次元[3]からまとめると、日本語指導、学校生活支援、教科指導、母語支援等の道具的サポート機能と、居場所の提供、相談相手などの情緒的サポート機能を果たしていることが分かる。

これらの研究は、すでに日本語教室やボランティア団体というサポート・システムにアクセスしている一部のニューカマー生徒を対象としている。つまり、ここで対象とされるニューカマー生徒は、日本語教師やボラ

ンティア支援者というリソースがあり、組織的なサポート・システムからのソーシャルサポートが与えられている環境にあるといえる。しかしながら、多くのニューカマー生徒、特に日本語にほぼ問題がなくなったと判断されるニューカマー生徒には、フォーマルに与えられる組織的なサポート・システムはほとんどない。また、サポート・システムの情報を知り得た場合しかアクセスできないことが問題である。このような、組織的な与えられたサポート・システムがないニューカマー生徒に関しては、これまで困難対処の際に、どのように自らがソーシャルサポートのリソースにアクセスし、それをどのように活用しているかについては明らかにされていない。ニューカマー生徒がどのようなリソースにアクセスし、そのリソースはどのような機能をもっているのかをニューカマー生徒の視点に立って検討する必要があると思われる。

## 2　研究目的と研究課題

このような現状を踏まえ、本研究では、ソーシャルサポートの構造的な側面であるリソースと、機能的な側面に焦点をあて、ニューカマー生徒が困難対処の際に実際にアクセスし、活用しているリソースにはどのようなものがあるのかを明らかにするとともに、そのリソースの機能を検討することを目的とする。リソース間の比較、リソースを用いる対象者間の比較を試みることで、リソースのサポート機能やそれぞれのリソースにおける関係性を示すことを試みる。以上のような目的から、以下に研究課題を３つ設定した。

研究課題１：ニューカマー生徒が困難対処において活用しているリソースはどのようなものか。

研究課題２：ニューカマー生徒が困難対処において活用しているリソースの機能はどのようなものか。

研究課題３：ニューカマー生徒の困難対処におけるリソースの活用は対象者によりどのように異なるか。

## 3　研究方法

### 3.1　対象者および調査方法

2011年３月から８月にかけて、ニューカマーの男女６名を対象に半構造化インタビューを行った。インタビュー時間は１人につき60分程度で、質問の内容は、来日後から現在までの日本の生活における困難やその対処、困難対処の際の家族や友人、学校の教師、地域社会の人々からのサポートについてである。対象者は19歳から25歳の男女６名とした。対象者の年齢を上記のように設定した理由は、中学校や高校時代の困難やその対処に関する質問内容は、困難の渦中にいる現在の中高生よりも、19歳以降の対象者のほうがより冷静に振り返ることができ、自分自身の困難を静観できると判断したためである。出身国は全員がブラジルで、通算の滞日年数はいずれも10年以上であった。対象者の属性を表１に示す。

**表１　対象者の属性**

| 対象者 | 年齢 | 来日年齢 | 通算滞日年数 | 家族構成 |
|---|---|---|---|---|
| A | 20 | 6 | 13年 | 父・母・姉・弟 |
| B | 25 | 6 | 16年 | 父・母・弟 |
| C | 24 | 4 | 19年 | 父・母・妹２人 |
| D | 19 | 4 | 15年 | 父・母・妹 |
| E | 21 | 8 | 13年 | 父・母・弟 |
| F | 25 | 6 | 18年 | 母・姉 |

### 3.2　分析方法

６名のインタビューの内容を文字化したデータを分析対象とした。ニューカマー生徒が実際に活用しているリソースについては、インタビューデータの中から困難対処の際に活用しているリソースをすべて抽出し、カテゴリー分けを行った。また、そのリソースの機能についても同様に抽出し、コーディングを行った。その後、リソースとその機能を縦軸、対象者６名をそれぞれＡ～Ｆとし横軸に示したマトリックス（表２）を作成し、リソース

のカテゴリー間の比較、対象者間の比較を行った。

## 4　結果と考察

### 4.1　ニューカマー生徒の困難対処におけるリソース

研究課題１のニューカマー生徒の困難対処におけるリソースについては、データの中から困難対処の際に活用しているリソースをすべて抽出し、カテゴリー分けを行った。その結果を図１に示す。抽出されたリソースは、そのリソースの属すコミュニティごとに分類され、大きく〈家族コミュニティ〉〈学校コミュニティ〉〈地域コミュニティ〉の３つのカテゴリーが得られた。〈家族コミュニティ〉のカテゴリーには、母親、父親、兄弟が含まれ、〈学校コミュニティ〉のカテゴリーには教師、友人、日本語教室の教師が含まれる。〈地域コミュニティ〉のカテゴリーは、ブラジル人の友人、近隣の大人、母親の会社の人、カラオケ店の店長など様々なメンバーで構成されている。ニューカマー生徒は、家族や学校のような固定化したコミュニティ以外においても困難対処におけるリソースを獲得していることが窺える。

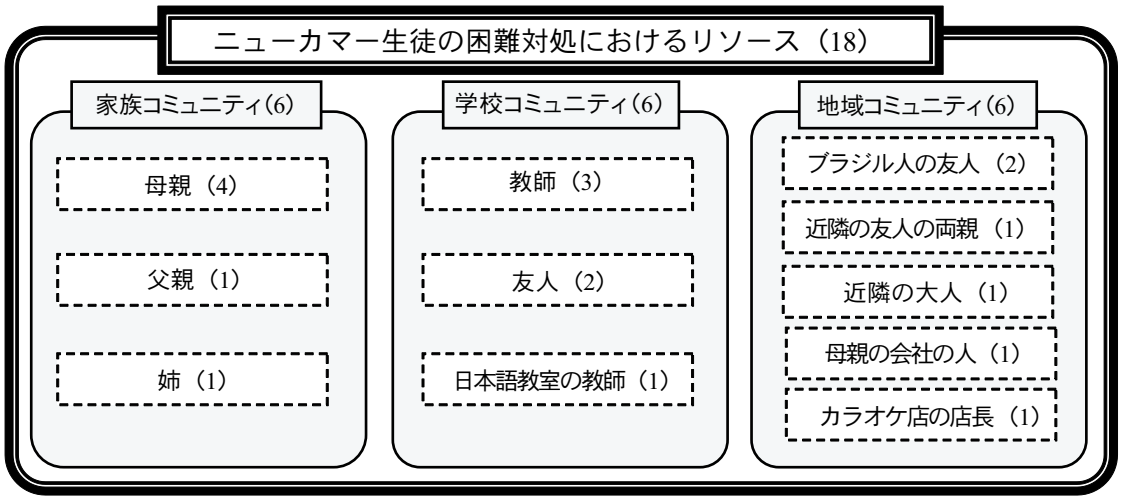


**図１　ニューカマー生徒の困難対処におけるリソース**

### 4.2　ニューカマー生徒の困難対処におけるリソースの機能と活用

研究課題２・３として挙げたリソースの機能とリソースの活用について検討する前に、まず表２について説明しておく。対象者Ａ～Ｆそれぞれのリソースとその機能を横軸に示した。その際に、リソースを前節で分類されたカテゴリーごとに整理し、縦軸にそれぞれのカテゴリーに含まれるリソースとその機能が示されている。さらに、それぞれの対象者を、困難対処の際にどのカテゴリーのリソースをよく活用しているかにより分類した。まず、家族、学校、地域コミュニティのすべてのリソースが十分ではなく、その機能も十分に活用できているとは言えないＡとＢのようなタイプを〈全般的ソーシャルサポート（以下、SS）リソース不足型〉とした。次に、困難対処におけるリソースが主に家族であるＣとＤのようなタイプを〈家族SSリソース中心活用型〉とした。さらに、困難対処におけるリソースを主に地域コミュニティの中に見つけたＥとＦのようなタイプを〈地域SSリソース中心活用型〉とした。この分類については、4.2.2.において、詳しく述べることとする。

#### 4.2.1　ニューカマー生徒の困難対処におけるリソースの機能

研究課題２のニューカマー生徒の困難対処におけるリソースの機能については、4.1においてKJ法で分類されたカテゴリーごとにリソースをまとめ、その機能を表２の縦軸に整理した。

まず、家族コミュニティには「相談相手」「心の拠り所」という情緒的サポートと「進路情報提供」「進路選択肢提供」「友人紹介」「ロールモデル」などの道具的なサポート機能があり、その機能を持っているのは主に母親

である。母親以外の姉や父親には、主に道具的サポートの機能があることが示されている。

次に、学校コミュニティには「孤独回避」「気分転換」「相談相手」「状況配慮」「進路アドバイス」「生活・進路情報提供」の機能が見られた。学校の教師に注目してその機能を見てみると、「進路アドバイス」「生活・進路情報提供」「状況配慮」に限られる。ここから、学校生活において最も重要なリソースの一つであると考えられる学校の教師は、情報提供などの道具的サポートの機能は果たしているものの、ニューカマー生徒の困難対処におけるサポート機能を十分には果たせずにいる状況を読み取ることができる。学校の友人に関しては、相談相手など困難対処のリソースとなる場合もあれば、いじめや疎外感を与えられるというように困難の要因となる場合もあり、「人間関係がサポートとともにストレッサーも作りだす（Dalton,J et al, 2001）」ことが窺えた。

**表２　ニューカマー生徒の困難対処におけるリソースとその機能**

| | 対象者 | 家族コミュニティ | | 学校コミュニティ | | 地域コミュニティ | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | リソース | 機能 | リソース | 機能 | リソース | 機能 |
| 全般的SSリソース不足型 | A | 姉 | ・生活面の世話<br>・いじめの対処 | 学校の友人 | ・孤独回避 | × | --- |
| | | 母親 | ・就職先の紹介 | | | | |
| | B | 母親 | ・ブラジル人の友人紹介 | × | --- | ブラジル人の友人 | ・居場所<br>・気分転換 |
| 家族SSリソース中心活用型 | C | 母親 | ・相談相手<br>・心の拠り所<br>・進路アドバイス | 学校の教師 | ・進路アドバイス | 近隣の大人 | ・話し相手（聞き役） |
| | | 父親 | ・自立促進<br>・住環境選択 | | | | |
| | D | 母親 | ・相談相手<br>・心の拠り所<br>・進路情報提供<br>・進路アドアイス<br>・ロールモデル | 学校の教師 | ・生活・進路情報提供 | × | --- |
| 地域SSリソース中心活用型 | E | × | --- | 日本語の先生 | ・相談相手<br>・理解者 | 近隣の友人の両親 | ・相談相手<br>・居場所<br>・親代わり<br>・非行の抑止 |
| | | | | | | ブラジル人の友人 | ・居場所<br>・情報提供<br>・進路アドバイス |
| | F | × | --- | 学校の友人 | ・気分転換<br>・理解者 | カラオケ店の店長 | ・相談相手<br>・心の拠り所<br>・居場所<br>・親代わり<br>・非行の抑止 |
| | | | | 学校の教師 | ・状況配慮 | 母親の会社の人 | ・相談相手<br>・居場所 |

さらに、地域コミュニティには「相談相手」「心の拠り所」「居場所」「親代わり」「非行の抑止」「気分転換」「話し相手」「進路アドバイス」「情報提供」等、ニューカマー生徒の様々な困難に対応可能であると考えられる多くの機能が見られた。地域コミュニティにおいても、情緒的サポート、道具的サポートの両面の機能があることに加え、地域コミュニティのリソースの持つサポート機能は、家族や学校コミュニティ以上に豊富であることが示された。

このように、ニューカマー生徒が困難対処の際に活用するソーシャルサポートは様々なリソースによって構成され、様々な機能があることが示された。

#### 4.2.2　ニューカマー生徒の困難対処におけるリソースの活用

次に、研究課題３のニューカマー生徒はこれらのリソースをどのように活用しているかについて、対象者Ａ～Ｆそれぞれの状況を表２の横軸に沿って見ていく。

まず、ＡとＢはともに、親との関係は悪くはないが、親が朝早くから夜遅くまで仕事に出ているなどの事情により、親が困難対処の際のサポートの機能、特に情緒的サポートの機能を十分に果たしていないことが見受けられた。また、Ａは一時期は学校に通っていたものの、信頼できる友人ができず不登校になり、Ｂも同様に学校に馴染めず居場所がない、学校の教師に信頼感を抱けない等の理由により不登校となってしまったことから、学校コミュニティにおけるリソースも不在となっている。さらに、地域コミュニティにおけるリソースもあまり獲得していない。地域コミュニティにブラジル人の友人を持つＢは、その友人に関して、気分転換や物理的な居場所としてサポート機能は持っていたものの、非行につながる危険性もあったと振り返っており、建設的な関係ではなかった。このように、困難対処における重要な機能を持つリソースが全体的に不足していることが窺えるＡとＢは、〈全般的ソーシャルサポート（以下、SS）リソース不足型〉であると考えられる。この状況において進路選択をしたＡが「(授業に）ついていけなくて、で、その担任が、じゃあ、もう、そこ座って見てなって言われて。 で、そこからもう学校行きたくなくなって、仕事したい、早く就職、みたいな感じになった。」と語っているように、不登校になった時には詳細な進路情報の提供者がいないことが分かる。つまり、〈全般的SSリソース不足型〉においては、進路選択におけるキーパーソンが不在となってしまうことが考えられる。働くことを選ぶこと自体は悪いことではないが、Ａが後に進学しなかったことを後悔していることから考えると、就職や進路に関する詳細な情報などの情報提供機能をもったリソースの獲得が必要であったことが示されているといえる。

次に、ＣとＤのリソースの活用状況について見ていくと、家族、特に母親が道具的、情緒的サポートなどの多くの機能を担っていることが分かる。学校コミュニティ内にもリソースは獲得しているが、その機能は進路に関する道具的なサポートに限られている。このことから、ＣとＤは〈家族SSリソース中心活用型〉であると考えられる。進路選択に関するＤの語りを見てみると、「(理想は）お母さん。ボランティアグループを自分で立ち上げて、・・・中略・・・そういう困ってる外国人の子ども、小学校でも中学校でも集めてきて、先生とかも集めてきて、日本人に日本語教えてもらうようにとか、そういうの（が将来の夢。)」と語っており、高校進学だけでなく、将来の職業までを見据えて進路選択をするうえで、母親がロールモデルとしての機能を果たしていることがわかる。ＣやＤの場合は、進路に関しても母親が相談相手となっている。ニューカマーであるＣとＤの母親もＡやＢの母親同様、日本における進路についての詳しい情報は元々持ち合わせていなかったが、母親が職場などの人脈を利用し、率先して情報収集をし、ＣやＤに対して情報提供を行っていた。つまり、家族SSリソース中心活用型の親は、親自身が地域コミュニティとのつながりを持ち、日本の生活、子どもの教育に関する情報を得ていることがわかる。

さらに、ＥとＦはともに、家族との不仲が顕著であり、家族は困難対処のリソースではなく困難の要因となってしまっていた。また、学校コミュニティには友人や教師がその状況を理解し、配慮してくれてはいるが、積極的なサポート機能を果たしているとは言えない状況であった。しかし、地域コミュニティの中には、生活面の心配をしたり、相談相手になったりするなど、多くの機能をもったリソースが存在し、居場所が確保されていた。このようなＥとＦは〈地域SSリソース中心活用型〉であると考えられる。Ｆがどのように地域コミュニティからリソースを獲得したかが、次の語りからわかる。「壁はすごい作ってました。・・・中略・・・向こうから毎日のように話しかけてくれたりとか、すごいしてくれて。それでだんだん慣れていくうちに、こう、打ち解けたみたいな。それじゃなかったらもう絶対なかったですね。」この語りから、地域コミュニティの大人から当該生徒に熱心な声かけをすることにより、関係を構築していったことが窺える。さらに、次にあげるＥの語りからも地域コミュニティの大人が熱心に声かけをしたことにより関係を構築したことが窺える。「家出とかもしたかったんですけど、(友だちの）父さんとお母さんが絶対止めたほうがいいよって、絶対あとで後悔するよ～って。・・・中略・・・ぐれるかぐれないかってときに、うちにおいで～っていっぱい話をしてくれて。それでぐれないですんだのかなって思って。」と語っており、〈地域SSリソース中心活用型〉は、地域コミュニティの大人が当該生徒にアクセスを試みることにより、ニューカマー生徒の困難対処のリソースとなり、非行の抑止という重要な機能を果たしていたことが示されている。

## 5　総合的考察と今後の課題

本研究の結果から要約すると、ニューカマー生徒は家族、学校、地域コミュニティ内に様々な困難対処におけるリソースを獲得し、それぞれのコミュニティが様々な機能を担っていたことが示唆された。また、対象者をリソースの活用タイプごとに検討すると、〈全般的SSリソース不足型〉では日本における進路指導のキーパーソンが不在となってしまったこと、〈家族SSリソース中心活用型〉では、リソースの中心である親が地域コミュニティとの関わりを持ち情報収集を行うことなどにより、多くの機能を果たしていたこと、〈地域SSリソース中心活用型〉では、家族や学校から得られるはずであった機能の多くを地域コミュニティのリソースが果たしていたことが、特徴として挙げられる。このように、コミュニティ内のリソース、それぞれの機能、対象者の活用の特徴を検討したことにより、家族、学校、地域コミュニティそれぞれの機能がより明確に示されたと言える。

以上の結果から、ニューカマー生徒が困難対処の際に活用できるリソースをより豊富にしていくために、家族、学校、地域、それぞれのコミュニティの機能について考察を行う。

まず、家族コミュニティの機能については、〈全般的SSリソース不足型〉や〈地域SSリソース中心活用型〉において、家族コミュニティの困難対処におけるサポート機能が少ないことが示された。中学生という思春期の特徴が顕著に表れ、親との関係が悪化したことも考えられる。また、今回の対象者が日系ブラジル人であることから、彼らの両親の来日目的が出稼ぎであった場合には生活時間の大半を労働に費やし、家族のことを顧みる余裕がなかったことも家族コミュニティのサポート機能が少なかった要因の一つであると考えられる。対象者が中学生であった2000年前後は、出稼ぎ目的で来日したニューカマーの長時間労働などの生活スタイルがニューカマー生徒の教育に支障をきたす場合がある（太田・坪谷，2005）と指摘されていた。このような状況が要因となり、時間的物理的に相談することが難しいことに加え、両親との関係が希薄になってしまった可能性も考えられる。

さらに、ニューカマーである親は、進学等の日本の教育に関する情報を持ち合わせていないことから、子どもの進路相談に関われないと考えていることも予想される。学校コミュニティや地域コミュニティにつながりを持たない親であれば、子どもの教育が学校や子ども任せになるなど、親として進路指導をすることができない状況が考えられる。

このように、ニューカマーの家族コミュニティがその機能を十分に果たすことは、家族コミュニティ内のリソースのみでは難しく、他のコミュニティとつながることが必要不可欠であると考えられる。このことは、〈家族SSリソース中心活用型〉における親がサポート機能を果たすために、自らが地域コミュニティと関わりを持ち情報収集をしていたことからも示されている。ニューカマー生徒へのサポート機能を充実させるためにも、ニューカマーの親への情報提供等のサポートを学校、地域コミュニティがより積極的に行っていくことが重要であるといえる。

次に、学校コミュニティの機能について検討していくと、特に〈全般的SSリソース不足型〉において、学校コミュニティ内のリソースの不在が顕著であったが、その他のタイプにおいても学校コミュニティの機能の少なさは検討するべき課題であるといえる。誰かに相談したいことがあったときに学校の教師には相談せず、母親や地域コミュニティの大人に相談をしていた対象者にその理由を尋ねると、担任やその他の学校の教師は忙しそうで相談しにくかったことを理由に挙げていた。つまり、昨今叫ばれる教師の多忙により、教師にゆっくりと話せるような雰囲気、話を聞いてくれるような姿勢が感じられず、相談しにくかったということであろう。教師の多忙は、教師のバーンアウトに関する研究においても問題視されており、教師へのサポートの必要性について言及されている（宮下，2009）。また、教師の異文化に対する理解不足や指導力不足も理由として挙がり、教師の経験知の不足も相談できない理由の一つとなっている。これらのことから、教師自身もニューカマー生徒をサポートしたいと思っていてもできない状況が考えられ、仕事量の問題の解消、教師の異文化への理解が促進されるような取り組みを行うなど、教師へのサポートが必要であると思われる。例えば、学校コミュニティ内だけでなく地域コミュニティのリソースを活用しながら、教師と生徒が一緒に異文化について学び、考えられるような授業時間を設けることなどが考えられる。学校という場は、ニューカマー生徒が多くの時間を過ごす場であるととも

に、教師や日本人の生徒、ニューカマー生徒、卒業生など活用可能性を含んだリソースが豊富にある。そのリソースのそれぞれの良さを活かすために、地域コミュニティのリソースとのネットワーキングを行い、それぞれのリソースへのサポートを行っていくことが重要であると思われる。

最後に、地域コミュニティの機能については、〈地域SSリソース中心活用型〉において、地域コミュニティのリソースが居場所の提供や非行の抑止などの重要な機能を多く担っていることが示されたが、〈地域SSリソース中心活用型〉以外の対象者は、地域コミュニティのリソースをあまり獲得していないことが示された。地域コミュニティのリソースは、家族や学校コミュニティのリソースのように必然的に与えられるものではない。また、生まれながらにしてその土地に居住している日本人とは異なり、海外から移住してきた、特に、転居を繰り返しているニューカマーにとっては、密接な関わりを持ちにくいことが考えられる。つまり、ニューカマー生徒にとって最もアクセスしにくいリソースであると言える。それでは、なぜ地域コミュニティ活用型のＥやＦは、地域コミュニティに多くのリソースを獲得できたのだろうか。まず、ＥやＦは、来日以来同じ地域に居住していた。また、その居住地域は、「(声をかけてくれた友達の両親の家と）近所だったので、だいたい（Ｅの家のことが）雰囲気的にわかってたんですよね。」というＥの語りに見られるように、地域コミュニティにおいて近隣住民がお互いのことをある程度把握しあっているような地域であった。つまり、ニューカマー生徒が一地域に長く居住していることにより、このような地域の特徴をうまく生かすことができ、地域コミュニティのリソースからのアクセスを受けることができたのではないかと考えられる。それにより、地域コミュニティにおけるリソースの獲得に至り、それらが居場所の提供や非行の抑止という重要な機能を果たしていた。昨今では、地域コミュニティの結びつきが希薄になっているというが、ＥやＦの事例に示されたように、地域コミュニティは重要な機能を持ち得ることを考えると、他の地域においてもコミュニティの再生が望まれる。その上で、地域コミュニティのリソースである大人からアクセスしていくことにより、ニューカマー生徒の困難対処におけるリソースとなり、ニューカマー生徒のセイフティネットとしての機能を果たすことができると思われる。

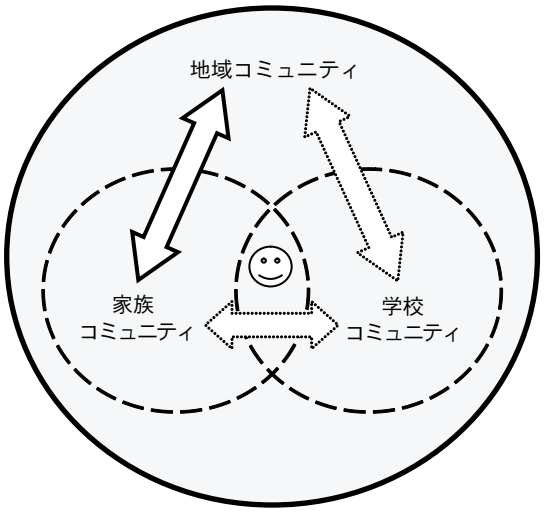


**図２　ニューカマー生徒のソーシャルサポート・ネットワーク**

今後は、地域コミュニティのリソースからニューカマー生徒にアクセスすることとともに、家族コミュニティや学校コミュニティのリソースが、ニューカマー生徒と地域コミュニティのリソースをつないでいくようなサポート機能を持つことにより、ニューカマー生徒の困難対処におけるリソースは、より豊富になっていくものと思われる。図２に示したように、今回の事例においては、家族コミュニティと地域コミュニティの連携は見られたが、他の連携は見られなかった。先に一つの例として挙げたように、学校コミュニティと地域コミュニティが連携すること、家族コミュニティと学校コミュニティが連携することにより、それぞれのコミュニティが他のコミュニティを支えるようなネットワークを作って行くことが重要であると思われる。そして、その上で、地域コミュニティ全体が、ニューカマー生徒のセイフティネットとしての機能を担っていくことが必要であるといえよう。

以上の通り、ニューカマー生徒の困難対処におけるソーシャルサポートのリソースとその機能について述べてきたが、本研究は、６名のニューカマー生徒の協力によるものであるため、一般化には限界がある。今後の課題としては対象者を増やし、今回見られなかったソーシャルサポートの活用のタイプも検討していく必要があると思われる。また、質問紙等を用いて量的な調査も行い、ニューカマー生徒のソーシャルサポートの構造や機能の一般的傾向を明らかにすることにより、さらに信頼性の高い研究結果を示していきたいと考えている。

## 〈註〉

1）1970年代以降に日本に居住するようになった外国人（志水，2008）のことである。

2），3）ソーシャルサポートには、構造的次元と機能的次元があると考えられており、構造的次元は個人がもつ人間関係の広がりやその性質を指し、機能的次元は人間関係から提供されるサポートがどのような機能を果たすかを指す（丹羽，2007）。

## 〈参考／引用文献〉


太田晴雄・坪谷美欧子「学校に通わない子どもたち―不就学の現状―」宮島喬・太田晴雄編著『外国人の子どもと日本の教育』東京大学出版　17－36

岡村佳代（2011）「ニューカマー生徒が経験する学校生活における困難とその対処行動－中学生と高校生の比較を中心に」異文化間教育学会編『異文化間教育』第34号，異文化間教育学会　95－105

佐藤郡衛（2001）『国際理解教育　多文化共生社会の学校づくり』明石書店

末藤美津子（2011）「外国につながる子どもたちへの教育支援―多文化共生社会の構築をめざして―」東京未来大学紀要委員会編『東京未来大学研究紀要』4　東京未来大学　9－16

志水宏吉（2008）「ニューカマーと日本の学校」志水宏吉編著『高校を生きるニューカマー　大阪府立高校に見る教育支援』明石書店

清水睦美（2006）「ニューカマーの子どもの青年期―日本の学校と職場における困難さのいくつか―」日本教育学会編『教育学研究』73⑷　日本教育学会　135－147

竹山典子・葛西真記子（2008）「日本語ボランティア教員による外国人生徒への支援―日本語支援教室を中心とした心理・社会的支援システムの構築に向けて―」コミュニティ心理学会編『コミュニティ心理学研究』11⑵　コミュニティ心理学会　144－161

光長功人・田渕五十生（2002）「ブラジル人の子どもたちは,どのようにアイデンティティを変容させるのか?-帰国後の再適応を観察して」奈良教育大学編『奈良教育大学紀要．人文・社会科学』51⑴　奈良教育大学　1－17

宮下敏恵（2009）「小・中学校教師におけるバーンアウト軽減方法の探索」上越教育大学編『上越教育大学研究紀要』28　上越教育大学95－104

中西久恵（2010）「日本で暮らす外国の文化的背景をもつ子どもへの教育支援」鉄道弘済会社会福祉部編『社会福祉研究』107鉄道弘済会社会福祉部　84－91

長崎秀一（2009）「学校内外の資源をフル活用した外国人生徒への支援」学校教育相談研究所編『月刊学校教育相談』23⑽ほんの森出版14－17

丹羽郁夫（2007）「ソーシャルサポートとセルフヘルプ」植村勝彦編『コミュニティ心理学入門』ナカニシヤ出版　119－140

法務省入国管理局（2011）『平成22年末現在における外国人登録者統計について』
http://www.moj.go.jp/nyuukokukAnri/kouhou/nyuukAntourokusyAtoukEi110603.html（2011年８月20日閲覧）

箕口雅博（2007）「ソーシャルサポート・ネットワーキング―連携と協働による援助―」箕口雅博編著『臨床心理地域援助特論』放送大学教育振興会　95－106

Dalton,J.,Elias,M.J.,&Wandersman,A.(2001) Community Psychology : Linking Individuals and Communities. Stamford, CT : Wadsworth( J.ダルトン・M.イライアス・A.ウォンダースマン　笹尾敏明（訳）（2007）『コミュニティ心理学―個人とコミュニティを結ぶ実践人間学―』金子書房)

Levine,M.,&Perkins,D.V. (1987) Principles of community psychology : Perspectives and applications. New York : Oxford University Press.